

等に共通した筆致を観れば、所謂光長の畫風の主要は知ることが出来る。前にもたび／＼述べたやうに、光長の畫風は鳥羽僧正のそれと類似した點が多い。この兩大家が殆ど時を同じくして出で、勁健暢達なる畫風と、以て倭繪の新生一向を開拓したことは、その影響について十分に認めねばならぬ。

(以下續掲)

舊 師

八

郎

わが少年の日の歌の師、故郷にて失せたまひぬと
さゝて思ふまゝを歌ふ。

「で、けり、けむ、つゝ」とつゞて八衢を教へまし、はたゞに昨日を
垣の萩軒の高萱さや／＼にうたひたまひきあはれそのこゑ
涙おつばかりおぼえてき、入りし歌の御聲に似る聲もあれ
ふみてゆく道はたがへどもわが道もよしとぞ君は思ひたまひし
別るべき道とは知れど別れにし君とは更におもほえなくに
明け馴れて幾度われの入りつらむきしむならひの君が格子戸
城跡のいたゞきの火のたゞ一つほのめく道を夜毎通ひし
「心して歸れ夜くらし道悪し」椽に出で、はよくのたまひき
冬の夜の炬燵を中の物語り君しまさねば誰れとすべきぞ
よそにのみなりぞゆくべきをり／＼は君ます故に歸りし故郷